

# 戦火に散ったマスコット

⑥

阪神時代の辻さん



今年もまた、当たり前のように野球シーズンが到来した。現代の選手とは対照的に、新たな年を迎えられなかったのが、戦火に巻き込まれた職業野球選手たちである。1944（昭和19）年、阪神に入団した辻源兵衛（つじ・げんべえ）は、わずか1年しかプレーできなかった。69人いる戦没野球選手の中で、最年少の19歳で消えた悲運のプレーヤーがいたことを、知ってもらいたい。  
（新聞うずみ火記者・吉岡雅史）

## 阪神 辻源兵衛 に消えたいのち 南シナ海 ゆめと 背番号のない退団

### 「幻の甲子園」で 「ベスト4」に

辻源兵衛は、和歌山の古豪・海草中学（現在の向陽高校）を中退して阪神の一員になった。初代ミスター・タイガースこと藤村富美男直々にスカウトされたの入団だった。

1942（昭和17年）の夏、海草の3年だった辻は、急造投手としてチームを甲子園4強に導く。ただし、この大会は従来の朝日新聞主催ではなく、文部省が開催したもので、「幻の甲子園」と呼ばれ、正式な記録として残されていない。

当時の野球部員で、辻とは同級生だった山東（さんどう）祥二さん（78）は「足が速くて、肩も強く、長打力もあった。社交的で明るくてねえ。学校中の人気者でした。みんなゲンベエ、ゲンベエって呼んでました」と振り返る。

翌年の甲子園は春夏とも中止となり、旧制中学で最上級生の5年に進級することなく、辻はプロの世界へ。

### 大きな者にも立ち向かい

辻の実家は、和歌山市内で代々続く「辻源」という屋号の熟（な）れ寿司屋。サバをシャリ飯で包み、それを笹の葉で巻くという紀州独特のもので、地元でも評判の名店だった。婿養子の父親は、家風に合わない、辻が幼い頃に離縁されている。

祖母が、こと商売にはとことん厳しい人だったが、他人への気配りは完ぺきで、当時は貴重だったチョコレートも惜しげもなく、近所に配って回ったという。そんな祖母の影響を受け、まっすぐに育った一人っ子の辻には、谷崎潤一郎の「細雪」さながらの4姉妹のいとこがいた。

四女の多田千壽子（ちづこ）さん（65）さんは、辻の墓がある和歌山市内の寺の隣に住む。「私は3歳でしたけど、笑顔を覚えてます。地元では正義の味方だったそう、弱い者を守るために、例え大きな人にも向かっていった」と言う。

4姉妹の長女・田鶴子（たづこ）さん（78）は辻の3歳下。「私たちは兄妹みたい育ちました。穏やかなええ子でねえ、勉強もできて、一度表彰されたんですけど、ツジ・ゲンベエ・ドノって呼ばれると、みんな笑うんです。当時でも変わった名前でした」

### 1年だけのプロ入り

辻がプロ入りした44年は、特筆すべきシーズンである。ユニフォームは国防色、野球帽も戦闘帽に替えられ、チーム名には「軍」が加えられた。そして球史で唯一、背番号が廃止されている。

2位巨人軍に8ゲーム差をつけて優勝した阪神軍には、わずか15選手しかおらず、新人ながら辻の出番も多かった。打率2割4分1厘、6打点と成績は今ひとつでも、本職の外野以外にファーストやセカンドも守り、投手としても2度登板し、適性をテストされている。

素質が開花する前に、野球界は8月いっぱい活動できなくなり、辻は陸軍に



和歌山市内にある辻源兵衛の墓には、お供えが絶えない

### 戦争が夢と命うばった

70年を超える歴史を誇る阪神には、これまで述べ800人以上が在籍したが、背番号がないまま、退団したのは、ひとりだけである。

「戦争がなければ、そのあと野球ができたのに。まだ19歳ですよ、19歳」と、山東さんは悔しそうに話した。戦後しばらくして、遺族の元に戦死公

報が届けられたとき、骨壺には「昭和20年1月12日、仏領インドシナ（現在のベトナム）のサンジャック沖で戦死」と書かれた紙切れ1枚だけが入っていて、遺骨はなかった。

すると祖母は、庭にあった稲荷の祠を、突然ナタで壊し始めた。「罰が当たるがな」と周囲に制止されると、「罰が当たって死にたいんや」と泣き崩れたという。

中学時代の幻の甲子園といい、わずか1年のプロ生活といい、ここまで悲運がついてまわる選手も珍しいのではないだろうか。若い命を、将来の可能性を奪われた無念を、田鶴子さんは代弁した。「戦争なんか始めたやつは、ほんまにアホタレや」



辻の思い出を話すところ。右が四女・多田千壽子さん、左は三女・山本弘美さん

